
魔法少女リリカルなのは～極限の力～

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜極限の力〜

【Nコード】

N3323Z

【作者名】

akira

【あらすじ】

俺は急に神と名乗る人物から「世界を救ってほしい」と頼まれた。渡された力は極限の力：エクストリームガンダム。魔法少女リリカルなのは〜極限の力〜始まります。

「さあ、極限の希望を感じる。」

魔法少女リリカルなのはとエクストリームVSとのクロスです。不定期更新ですがお願いします。

ブローグ〜極限の力〜(前書き)

初めましてakiraです。

エクストリームVSをやってて急に書きたかったので書きました。
後悔はしてない。

プロローグ〜極限の力〜

気がついたら真っ白な空間にいた。

あれ？確かエクストリームVSをやってたんだよな、俺。

「気がついたかの？」

「おわ！」

「そんなに驚かんでもええじゃろうに。最近の若い奴らは直ぐに驚く。」

若い奴らじゃなくても驚くわ。

「まあ、ええ。とりあえず自己紹介しとこうかの。わしはお前さんたちで言う神と言う者だ。」

「え？神様？」

「と言っても思念体みたいなもので今のこの姿はお前さんたちのイメージしている神の姿であるだけじゃ。」

「ふーん。でその神様が俺に何の用？」

「実はお主を見込んで頼みがある。」

頼み？

「パラレルワールドは知っておるじゃろう。可能性の分だけ世界が

あるという別世界の事じゃ。」

うん、知ってるよ。だてに二次小説読んでるわけじゃないんだし。

「実はその世界の一つを救ってほしいんじゃないよ。」

「なんで？」

「『リリカルなのは』は知っておるじゃろう？その世界で管理局と
言う組織がいることを。」

あー。そう言えばそんな組織いたわ。

俺、時空管理局あんまり好きじゃないんだよね。

だってまだ9歳の子供に戦場向かわすってどんな精神してるって話
じゃん。

「とある世界では管理局が大幅に改善された世界もあれば、そのま
まの世界もある。」

しかし、今回の世界では管理局の行為があまりにも酷いものでの。
わしを含めた各神達の会合で

その世界の管理局に介入することにしたのじゃ。」

「ちなみにどんな？」

「…酷いもんじゃ。あの冷酷な冥界の王さえも涙を流したのじゃ。
お前さんと同じ人間なのにあそこまで非道な事が出来るのかと思うと
身震いするわ。」

どうやらかなり酷いことをしてるらしいな…。

まあ、最高評議会のトップは脳味噌だしな。考えることが逸脱して

んじゃね？

「しかし、我らが直接介入すれば世界に影響が及ぶ。そこでお主に白羽の矢が立ったのじゃ。」

「俺？」

「お前さんは特異点…。他世界に介入しても影響を及ぼさない存在なのだ。」

それにお主は心優しい人間じゃ。悲しい人を救う力を持つてるんじやよ。」

…自覚ねえ。

「ふおおおお…。こればかりは自覚できんよ。」

さて長話はこれでおしまいじゃ。お主には直ぐに飛んでもらう。」

「おい。ちょっと待て。俺は元の世界に戻れるのか？」

「元の世界にはお主はきちんという。」

慈愛の神からの要望でな、今のお前さんは精神体で元の世界にはきちんとお主はおる。」

これは大切な人達を悲しませたくないという配慮じゃ。」

そっか…なら安心した。」

「それとお主にこれを渡しておく。」

俺の身体が蒼白く光りだした。」

「お主がやっていたゲーム…。エクストリームV Sかの？
そのラスボスの機体をお主の身体と同化させた。」

ラスボスの機体：エクストリームガンダム！？

「もちろん3つの支援パーツも揃えておるし、お主の意思次第で戦闘フィールドをラスボスの専用ステージに出来る。それと非殺傷設定にもできる。」

ありがたい。元々エクストリームはカルネージ・タキオン・イグニスの3つのフェイズで真の力が発揮できる。それにエクストリーム・ユニバースなら周りの人や建物を破壊せずに済むからな。

「大体はこんな所じゃ。何か質問は？」

「無い。じゃあ行ってくるよ。」

そう言っただけの意識は薄れっていった。

神 side

「頼んじゃぞ…。あの世界に極限の希望を与えられんこと…。」

神はそう言っただけで粒子となって消えた。

プログラグく極限の力く（後書き）

駄文ですがよろしく願ひします。

出会は唐突に、悲しみを受け入れる者、（前書き）

連続投稿です。

出会は唐突に、悲しみを受け入れる者、

「ん…？」

眩しい…。俺は少しずつ目を開ける。

真っ先に目に飛び込んだできたのは見知らぬ天井だった。

「あ。気がつきました？」

俺は起き上がると声をかけられた方向に向く。

車椅子に座った少女―八神はやてとの出会いだった。

はやて side

うちの名は八神はやて。広いお家で一人で住んでる。

両親は二人とも事故でなくなってもうた。

でも生活は遠い親戚のおじさんが見てくれるから大丈夫なんやけど。

「あ、ご飯作らな。」

うちはベットを降りて車椅子に座る。

いつかは知らんけどうちの足は悪くて車椅子で生活してる。

と言ってもつらくはないんよ？だって今まで一人で生きていたから…。

「うんしょと。」

服を着替えた後、うちはリビングに行く。
そこはいつもの風景…じゃなかった。
ソファアのすぐそばで男の人が倒れてた。

「ど、泥棒…!？」

うちは直ぐに通報しようかと思ったけど、男の人を見てなぜか通報する気がなくなった。

なんて言うんやろ…? なんだか…とても暖かい感じがするからかな? とりあえずうちは男の人に毛布を被せて朝ごはんを作り始めた。
時々様子を見たけど、まったく起きない。

朝ごはんを作り終えたとき、男の人に近づくとどうやら気付いたよ
うや。

「あ。気がづきました?」

「…君は?」

男の人はどうやら驚いている様子。うん、この人が泥棒ってのは
無いな。

「八神はやてって言います。お兄さんは?」

うちが自己紹介すると、お兄さんは少し考え始めた。
そんなに自分の名前を言うのに考えるものかな?

「俺の名は…e^{イクス}xだ。」

それがお兄さん…イクスさんとの出会いだった。

イクス
| side

ふう…危ない。

俺の本当の名前は元の世界のモノだ。ならここに居る俺はエクスト
リームガンダムを動かしていた
思念体：イクス | だ。管理局に極限の絶望を送るための。

「所でイクスさんはどうしてうちの床で倒れてたん？」

俺は彼女の家倒れていたのか。

あの神め、迷惑をかけるな。責任を負わされるのは俺だぞ！

「すまないな。俺もよくわからないんだ。」

とりあえずこう答えておく。

実質どうしてこの場所に来たのか俺にもわからない。嘘は言っ
てない。が本当の事も言っていないがな。

「そつなんや…。あ！しもつた！」

はやてはキッチンの方へ言った。
そう言えばなにやら焦げ臭いな。

「ああ…。焼き鮭が炭に〜。」

…どうやら鮭を炭に変えてしまったようだ。

「すまない。どうやら俺のせいらしい。…」

「うづん！そんなことあらへん！元々うちが忘れてたせいやし！」

はやては手を振って答える。

俺はテーブルを見て気付いた。

食器が二人分あるのだ。

「はやて、この食器は誰のだ？」

「うちとお兄さんの分やで？」

何？

俺の？

「何故俺の分を？」

「お腹が減って倒れたんかな〜と思ってな。」

∴ 普通は警戒するか警察に通報するかだと思っぞ。

俺ならいきなり朝食と一緒に食べようなどとは思わん。

「それに誰かと一緒に食べるなんて久しぶりなんよ…。」

はやてがそう言つと悲しい顔になる。

そうだった…。

はやてのご両親は事故で亡くなっているのを忘れていた。

∴ 彼女は孤独、そして俺も。

なら俺に出来ることは。

「はやて。」

俺ははやての頭に手を置く。

「ふえ？」

「ご馳走になるよ。」

俺がそう言うとはやては満面の笑みになる。

「うん！ほな準備するから待っというてな！！」

はやては嬉しそうにして準備をし始めた。

そして朝食と一緒に食べる。

メニューはご飯、みそ汁、そして炭になった焼き鮭という和食の王道だ。

一緒にご飯を食べている途中、俺ははやてに有る提案を出した。

「はやて、俺は君の家族になりたい。」

「え？」

「俺も孤独だったんだ。両親はいないし、友達もない。

ずっと一人で生きてきた。でも、今はやてとこうやっていると
思うんだ。

俺は一人じゃないんだって。」

「…。」

「君が良ければ、俺は君の家族になる。どうだ？」

「ほんまに…、ほんまにうちの家族になってくれるん？」

「ああ。」

するとはやての目から涙があふれてきた。

「あ、あれ？なんでやる？なんで泣いてるんやろ？嬉しいはずなのに…、涙が止まらへん。」

泣き続けるはやてに俺ははやての所に行き、抱きしめた。

「辛かったな…。」

「…。」

「寂しかったな…。」

「…っ。」

「でも、もう我慢しなくていい。」

「う、うえ…。」

「俺がはやての家族になるから。」

「うわあああああああん！…！」

はやては泣きだした。

今まで寂しかった孤独を吐き出すように。
俺はただ彼女を抱きしめるだけだった。

神 side

わしは今送り込んだあの男「ex」^{イクス}の様子を見ている。
どうやら主要人物の一人、八神はやてとの接触到に成功したようじゃ
な。

そして今、ex^{イクス}が八神はやてを抱きしめておる。

「そうじゃ。それがお主の力なのじゃ。気づかんでもええ。ただそ
うするだけで人は救われるのじゃ。」

だからこそわしは彼を推薦した。

人の弱さを認め、それを受け入れる彼を。

彼ならばこの先起きる悲劇を喰い止めれるじゃろつ。

頼んだぞ…。

出会いは唐突に、悲しみを受け入れる者、（後書き）

如何でしょうか？

シリアスな雰囲気が出れば幸いです。

…出てくるかすごく不安ですが。

始まりの序曲〜極限の絶望を与えし者〜(前書き)

サブタイを考えるのが凄く苦手な自分…。
だれかアドバイスよろしくお願いします。

始まりの序曲〜極限の絶望を与えし者〜

「ごめんな…。服濡らしてもうて。」

泣きやんだはやては俺に謝って来た。

服を涙で濡らしてしまったことだ。

俺は気にするなと言ったがはやてが気にすると言いだしたため仕方なく俺が折れた。

するとはやては何か思いついたのか、リビングから出て行った。

「おまたせや〜。」

手に持っていたのはメジャー？

「イクにいの身体測らせて。」

「イクにい？」

「うん。だってうちら家族なんやろ？いつまでも他人行儀しとない。」

…そうか。

「そつだな。はやて。」

俺ははやての頭を撫でる。

はやても嬉しそうに笑顔になる。それは心からの笑顔だった。

はやて side

イクにいのサイズを測ったあとこちらは服屋に来てる。
イクにいは今着てる服しか持ってないからな。
ふふふ…。どんな服買おうかな？

「イクにい、これはどう？」

「…デザインは好きだが色がな。」

「何色がええん？」

「黒か白。」

「わかったで！」

服屋に着いたうちらはさっさくイクにいの服探しを始めた。
でもイクにいはおしゃれに興味がないらしくどれを選べばいいのか
わからなかった。
それで今うちがイクにいに似合う服を探してる。

「次はこれや！」

「…もう勘弁してくれ。」

イクにいはどんどん積まれていく服を見てげんなりしてる。
新しいイクにいの一面を見れたし、なにより楽しかった。

イクス
| side

…酷い目にあつた。
服自体興味の無かつた俺はデザインや色の好みをはやてに伝えて選んでもらつた。
だが、それがどんどんオーバーヒートしていき、着せ替え人形のようになつてしまった。

「いや、イクにはイケメンやからの服来ても似合うな。」
買い物で沢山したせいなのかはやてはご機嫌である。
まあはやてが喜んでいるのならそれでいいが。

(…!?)

その時だつた。
頭の中に電流のようなものが流れた。
俺は車椅子を押すのを止めた。

「どないしたん？」

はやてが俺に尋ねてくる。

「はやて、一人で帰ってくれるか？」

「え？」

「何か飲み物で買ってくる。何が良い？」

「うん。じゃあお茶！」

「ああ。気をつけてな。」

「うん、イクにいま早く買って来てな。」

そう言うとはやては車椅子を動かして家路に着く。
俺は反対方向に向くと、そこには仮面の男がいた。

「何の用だ。」

「…あの子と関わるのは止める。」

「断る。貴様ら管理局にその権利などない。」

「…!?!?」

どうして俺が管理局を知ってるって驚いているようだ。

「復讐は何も生まん。お前たちの方こそ馬鹿げた事は止める。」

「うるさい！父様の気持ちを知らないで!!」

声が男の声から女の声に変わった。

そう言えばこいつら双子の猫？だったよね。

「ふん。一人では何もできない奴に俺を倒す事はできんぞ。」

「!?!?」

俺がそう言つと俺の身体が人間の身体からロボットの原型になる。
まだ装甲を展開していない状態だ。

「ふん！」

俺は球体のフィールドを作りだす。そこに表されるのはガンダムの戦闘の記録。

「はあああああああ！！！！」

記録達が俺の身体に取り込まれる。

そしてそれは一つの機体の姿になる。

「さあ、管理局よ。お前に極限の絶望をくれてやる。」

俺はこの瞬間、エクストリームガンダムとなった。

始まりの序曲〜極限の絶望を与えし者〜（後書き）

やっとエクストリームガンダム登場。

ちなみ主人公の年齢は18歳です。

極限の絶望？！殺戮のカルネージ（前書き）

初戦闘です。

グダグダなのは許してください。

極限の絶望？〜殺戮のカルネージ〜

アリア side

私の名はリーゼアリア。

父様の命令で私は八神はやてを監視していた。

だが、不測の事態が起きた。

それは昨日までいなかった謎の男だ。

彼は彼女と一緒に服を買いに行っていた。

その帰り道に警告をした。「彼女と関わるな」と。

でもその返答はそれ以上のものだった。

管理局を知り、そして私達の目的を知っていた。この男は危険だ！

そう思った時。

「ふん！はあああああ！！！」

男の身体が光だし、そこに居たのはあの男でない。

「さあ、管理局よ。お前には極限の絶望をくれてやる。」

人型の…ロボットがいた。

ex^{イクス} side

エクストリームガンダムへとなった俺は次に戦闘フィールド『エクストリーム・ユニバース』を展開した。

住宅街から一変。巨大な結晶がそびえ立つフィールドとなった。

「こ、これは!?!」

「アリア!」

どうやら監視をしていたのは姉のアリアか。今来たのは妹のロツテか。

「お前何をしたんだ!」

「ふん。貴様管理局とは違い、俺は環境破壊をしたくないのでね。このフィールドを展開させてもらったただけだ。」

「でもこつちにはあたしたちがいる。…あまりこのような行為はしたくなかつたけどあなたを連行します!」

連行か…。

まあガンダムに変身したり、フィールドを展開したらそうなるわな。だが、ただでやられる俺ではない。

「やれるものならな。カルネージ・フェイス展開。」

俺の真下に黒い装甲の大型パーツが現れる。

俺はそのまま下に降り、カルネージ・フェイスと接続する。

「さあ、殺戮の宴を始めよう。」

「!?!」

俺は右手に大型ビームライフルを構え、二人に放つ。

二人は二手に分かれるが、元々このライフルは牽制だ。

「爆ぜろ!!」

俺は両手を広げて火球団を4発水平にアリアに放つ。
そのうちの1発に当たるとアリアはスタンした。

「か、身体が動かない!!」

「アリア!?!」

「受けてみよ!!」

次にコンテナミサイルを放つ。上空に発射されたミサイルはロツテ
に向かってミサイルの雨として降り注ぐ。

「キヤアアアア!!」

ミサイルで足止めされるロツテ。

俺はとどめの1撃を放つために真上に飛んだ。

コンテナを肩にマウントし、それを地上に向ける。

中心地は二人からやや外れた位置。

「光に包まれるがいい!!」

俺は照射ビームを地上に向け放つ。

そして地上に当たるとそこを中心に巨大な爆発が起こる。

二人はシールドで衝撃を抑えているようだが、この攻撃はまだ終わ
っていない。

「な!?!」

ロツテが驚く。

それは地上から火柱が爆心地を中心に広がっていくからだ。

このフィールドはエクストリームガンダムの意思で自在に出来る。
火柱が二人を包み込んだ。

「「キヤアアアアアアアアアア！！！」」

俺は火柱が収まると地上に降りた。

「どうした？俺を連行するのではなかったのか？」

「あ、ああ…。」

アリアの顔は仮面で見えないが恐らく絶望を感じているだろう。

ロツテは気絶して変身が解けている。

…これぐらいで良かろう。

「もう一度言おう。俺はお前の指図は受けない。

そして万が一俺の家族に手を出してみろ…。その時は貴様らを殺す。

」

ありつただけの殺気を込め、俺はフィールドを解除し、その場を後にした。

…いけね。お茶買わなきゃ。

帰った時、はやての頬が膨らんで怒っていたのは余談である。

極限の絶望？〜殺戮のカルネージ〜（後書き）

グダグダだ…。

文才が欲しい…。

日常？人とは絆で繋がる者（前書き）

日常パートです。

ある程度のご都合主義があります。

そしてやっと魔王登場です。

日常？人とは絆で繋がる者

俺がはやての家族となって早1ヶ月。

はやての病気を見てくれる石田先生に紹介したりと結構平穩だった。

「うん。経過は良好のようね。この療法で行きましようか。」

「はい！ありがとうございます！」

今、俺達はいるのは海鳴総合病院。

はやての病気の検診に来ている。

彼女の病気は原因不明の足の麻痺。しかし、その原因ははやての部屋の本棚にある魔導書だ。

ロストロギア通称『闇の書』。

蓄積型の魔導書で全666ページを埋めると巨大な力が手に入ると言う管理局が勝手に決めた危険物だ。

しかし、本当の名は『夜天の書』であり、歴代の主が手を加えたせいでそうなってしまっただけの代物だ。

一応神が残してくれたのか俺の力でこいつのバグは直せるらしい。もっとも今はその時期ではないが…。

「ex^{イクス}さん。ちょっとはやてちゃんの事でお話があるんです。良いですか？」

「ええ。構いません。はやては少し待ってくれるか？」

「ええよ。じゃ、待合室で待ってるな。」

診察室から出たはやてを見送り、俺と石田先生になる。

「この1ヶ月間、はやてちゃんの病気は良好になっています。病気についても前向きに考えてます。」

「そうですか。」

「私は医者とは言え他人です。あの子の心を救えるのはあなただけ。どうか、これからも助けてあげてください。」

「はい。解りました。」

俺は石田先生の言葉を心に刻み、診察室を出た。

はやて side

病院から出たうちらは商店街で買い物をしていた。

今日の夕飯の担当はイクにいや。イクにいは料理が凄く上手くてうちよりもおいしいねん。

イクにいの作るご飯はうちの楽しみの一つや。

「イクにいは今日は何を作るん？」

「今日はそうだな……。中華料理だな。デザートに杏仁豆腐でも作るうと思つてな。」

「やったー!!」

思わず口に出てもうた／＼。

でもイクにはデザートが正直おいしい。
イクにいが初めて作ったゼリーなんか食べた瞬間おしかったもん。
絶対いい旦那さんになれるわ。

(だ、旦那さんか…／／／)

私はイクにいが大好きや。でもそれは家族としてもやけど一人の女性としても好き。

たぶんあの日、家族となってくれた日にうちは惚れてもたんやろうな／／。

「はやて?どうした?」

「ふえ!?!ううん!!今日は少し暖かいな思つて。」

「そつだな。もう5月だな。」

イクにいと出会つてもう1ヶ月…。

イクにいはうちと一緒に行動をしている。仕事を探す時もあるだけうちの時間を作りたいからって

図書館の司書さんをしている。だからうちもイクにいが仕事の際は図書館におる。

もうつちらは本当の家族なんや。

ずっと、ずっとこんな日が続けばいいな…。

イクス
ex | side

俺は商店街である店を見つけた。そう原作主人公である高町なのはのご両親が

経営している喫茶店『翠屋』だ。

ちようど3時のおやつには良いと思い、はやてに声をかける。

「はやて。ちようどそこに喫茶店があるから行ってみないか？」

「そやね。ちよと休憩したかったし。」

はやては快く快諾してくれた。

俺ははやての車椅子を押すため、はやてが扉を開ける。

「いらつしゃいませ。」

「すみません。大人一人に子供一人。ちよつと足が悪いんで…。」

「わかりました。」

対応してくれたのは高町士朗氏。

カウンター席だが、士朗氏がはやてに合う椅子を用意してくれた。

「ご注文は？」

「えつと…うちはオレンジジュースとシュークリーム。」

「コーヒーとシュークリームで。」

注文を取ってくれたのは高町桃子氏。

この『翠屋』の料理を作ってくれる人だ。シェフというよりかパティシエに近いな。

注文の品が来るまでの間、士朗氏が何か気になったのか声をかけてきた。

「君たちは兄妹か何かかい？」

「ええ。と言うより家族ですね。血は繋がってませんが。」

「どういふことだい？」

「…ちよつとこの子の前では少し。」

その時、扉のチャイムの音が鳴る。

「ただいま。」

「おお、なのはか。」

入って来たのは原作主人公高町なのは。別名『魔王』と呼ばれる少女だ。

…絶対 O H A N A S H I は受けないぞ！

「あれ？お客さん？」

「ああ。そうだ、なのは。この子と話し相手になってくれないか？」

「それがいい。はやて、一緒に話しても良いぞ。」

「…うん！」

やはり同じ年なのか互いに興味があつたようだ。

二人は俺たちがいる所から少し離れた場所でお話を始めた。

士朗 side

俺は今はやてと名乗る子と一緒に入って来た男と話をしている。
妻の桃子が注文の品をはやてちゃんに運んだ後、彼にも運んで私と
一緒に話している。

「ではあの子は今まで？」

「ええ…。一人でずっと生活していました。」

私と桃子は驚きを隠せない。
なのはと同じ年の子が一人で…。

「頼みがあります。」

「頼み？」

「もしよければはやての事を気にかけてくれませんか？」

「…どうしてですか？」

桃子が質問する。

すると彼の様子が変わった。

「…自分には成さねばならぬ事があるからです。」

その目は戦士の目だ。

大切な何かを守るための覚悟をした目だ。

「…わかったわ。私達もできるかぎりはやてちゃんを見かけたら声をかけてみるわ。」

「ああ。それになのはの友達だしな。」

彼ははやてとなのはの方に顔を向けると凄く優しい目になった。

…これが本当の彼かも知れないな。

なのは side

私、高町なのはと言います！

やっと私が登場出来たの！あれ…私何言ってるんだろ？

今日はジュエルシード探しは休みで翠屋に向かうと私と同じぐらいの子が来てたの。

お父さんが女の子と話相手にしてと頼まれた。

女の子は八神はやてちゃん。私と同年！

一杯お話したの。はやてちゃんが話すのは一緒に来てた男の人^{イク}ex

—さんの事ばかり。
—さん^{イクス}の話をするときはすごく活き活きとしてた。

「じゃあね。はやてちゃん！」

「うん！また来るね！」

はやてちゃんと^{イクス}ex—さんがお店に出るとき、お母さんがシュークリームを入れた箱を

はやてちゃんが膝に乗せてる。

「ありがとうございます。美味しかったです。」

「いえいえ。今度 ^{イクス}ex「さんのデザート食べさせてくださいね？」

「ああ、君の入れるコーヒーもね。」

お父さんとお母さんも ^{イクス}ex「さんの作るデザートに興味があるのか
凄く仲が良い。

「では。」

「「「ありがとうございます。」」」

最後は皆で送り出した。

これが私とはやてちゃん…、そして ^{イクス}ex「さんの出会いだった。

日常？人とは絆で繋がる者（後書き）

なんかはやてがヒロインぽい感じですが…。
でも主人公は鈍感設定なので気づきません。

夜天覚醒〜原作開始〜（前書き）

連続投稿です。

ようやく原作開始です。

…前振りが長くてすいません。

夜天覚醒〜原作開始〜

あれからさらに数ヶ月、俺はいつも通りはやてと一緒に病院で石田先生の診察を待っていた。

「はい。お薬出すからきちんと飲んでね。」

「ありがとうございます。」

はやては確かに病気に關して前向きに考えてる。

やはり俺と言う存在がいるのだろうか？…自覚はないが、そうであるなら嬉しい限りだ。

「すみません。e^{イクス}x^{クス}さんだけ残ってくれませんか？」

「はい。すまないな、はやて。」

「ええよ。でもイクにはうちのモンや！石田先生には渡せへんで！」

その言葉に俺と石田先生は笑う。

「それでどうしたんですか？」

「ええ、実は明日、あの子の誕生日なの。何かプレゼントとか考えているのかと思ってね？」

「…え？」

「まさか知らなかったの？」

「ええ…。」

あいつ…。そんな大事な事を教えて貰ってない。
まあ、それに気付かなかった俺も俺だが…。

「そう…良かったわ。」

「ありがとうございます。大切な事を教えてくれて。」

「いいわ。私もあなたのデザートを買ってるし。」

俺はもう一度お礼を言って診察室を出た。
さて、サプライズを準備しなきゃな。

はやて side

しもうた…。

明日はうちの誕生日やった…。しかもイクにいに教えてない…！
でも、今さら言うんも恥ずかしいし…。

そここう考えていたらもう夜中の12時前。

うちはベットで右に転がったり、左に転がったりしながらどうしようかと考えてとる。

(…ううん！これはチャンスや！明日誕生日教えてビックリさせるんや！)

これぐらいなら罰が当たらないと思いきう考えた。

そして時計の針が12時を指す。

その時やった。

本棚から禍々しい光が放っているのを。

ex^{イクス} | side

ふう……。出来た。今俺が作っているのはケーキだ。しかもワンホールケーキ。

シンプルな苺のケーキが出来栄は十分だろう。これで誕生日ケーキが出来た。

時計を見るともうすぐ12時……。ちょっと待て。たしかこの後！。

「うお!?!」

家が大きく揺れる!しまった!たしかこの日は!!

「はやて!?!」

俺ははやての寝室に向かう。

そこにいたのは見知らぬ4人。

「闇の書の起動…確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

「夜天の空に集いし雲。」

「ヴォルケインリッター…、何なりと命令を。」

はやての前に居るのはヴォルケインリッター…、闇の書の騎士たちだった。

シグナム side

私は闇の書の騎士、ヴォルケインリッターの将シグナム。闇の書の起動が確認されたため、新たな主の前に現れた。だが、主から返事がない…。その時、気配を感じた。

「お前は何者だ？」

その場に居たのは男だ。

傍に居るシャマルとザフィーラは主の傍に行き、ヴィータは私の隣で男を警戒している。

「俺は彼女の家族だ。」

「それを信用しろと？」

「できるだけならな…。」

男はまるで諦めるように言った。

恐らく信用されていないと思ったのだろう。

そうであったとしても主に害を為す物は排除しなければならない。

「はん！信用出来るか！」

ヴィータがそう言うと男はため息をついた。

「ならば勝負だ。俺が勝てば俺の話を聞いてもらっぞ。」
負ければ好きにしろと言う事か…。おもしろい。

「いいだろう。我らベルカの騎士。勝負を挑まれて逃げるわけには
いかん。」

「おもしれえ！ぶっ潰してやろうぜ！」

「なら、我とシャルマルは主を見ておく。」

「気をつけてね。」

私は愛剣のレヴァンティンを、ヴィータはグラーファイゼンを出した。

しかし、男は何も武器を出さない。

「ふん！はあああああ！！！！」

男の身体が急に光り出した！？何が起こった！？

「さあ、極限の力を見せてやろう。」

光が収まるとそこに居たのはロボットがいた。

こ、こいつは一体何者なのだ…！？

夜天覚醒〜原作開始〜(後書き)

次は戦闘シーンです。

極限の絶望？！剣舞のタキオン（前書き）

連続投稿その2です。

今回はタキオン・フェイズが登場します。

極限の絶望？！剣舞のタキオン！

俺はエクストリームガンダムへと変身し、戦闘フィールド『エクストリーム・ユニバース』を

シグナムとヴィータにのみ展開する。シャマルとザフィーラははよての傍に居るため展開は出来ない。

「な！？なんだこれは！？」

「てめー、いったい何しやがった！？」

あの猫姉妹もそうだったがやはりこれは魔法ではないらしいな。ミッド式、ベルカ式でもないこの現象は未知の物か。

「安心しろ。このフィールドははやくに危害を加えたくないために展開しただけだ。」

「なるほどな…。」

「さっさと降りてきやがれ！ボコボコにしてやる！！」

ヴィータはさっきから怒鳴っているが、シグナムは頭は冷静だが唇が僅かに上がっている。

バトルマニアとしての血が騒ぐのだろうか？

「なら、望みどおり降りよう。タキオン・フェイズ展開。」

俺の下にカルネージ・フェイズとは違う紅い装甲をした大型パーツが現れる。

俺はそのまま下に降り、タキオン・フェイスと接続を完了する。

「さあ、極限の力を見せてやる。」

俺は背中から大きな柄を取り出し、大型ビームソードを展開し構える。

「一つ聞きたい。お前は騎士なのか？」

「…違うな。俺は騎士ではない。ただ…。」

「ただ？」

「大切な家族を守るために手にした力だ！」

ヴィータ side

「舞え！」

ロボットの持つでけえ剣からでかい刃があたしらに向かってくる。でも遅えし、こんなの余裕で回避…!!?

「これは!?!」

床が上がる!?!これじゃ身動きができねえ!!!

「くっ! 障壁!」

<Panzerhindernis>

グラーファイゼンが障壁を張ってくれたおかげで何とかダメージは抑えれた。

地上じゃ不利だ！空で戦うしかねえ！

「シグナム！」

「わかってる！」

どうやらシグナムも地上で戦うのは不利だと感じたみてえだ。あたし達は空に飛んで反撃する。

「テートリヒ・シュラーク！」

「飛龍…一閃！」

シグナムはレヴァンティンを連結刃に変えて飛龍一閃、そしてあたしはテートリヒ・シュラークでロボットを叩き潰す！

「照らし出せ！」

あいつがそう言った光があいつを中心に衝撃波が出て、瞬間飛龍一閃が相殺される。

次にあいつは剣をすくい上げると床のマス目にそって落雷が降り注いでくる！

いけねえ！？あたしはもろに直撃を喰らった。

「刹那に刻め！」

な、何だよ！？あいつ身体を回転させながらこっちに来やがった！

「ちくしょおおおお!!!!」

何もできなかつた自分がくやくしてあたしは叫んだ。

シグナム side

何と言う剣の腕だ…。ヴォルケインリッターであるヴィータを倒すとは。

だが、何よりもあの剣筋にあるのは奴の言っていた思いが込められているのが解る。
もつとも勘でしかないのだがな…。

「はあああ!!」

私はレヴァンティンを剣に戻すと奴に斬りかかる!

「うおおお!!」

奴も負けじと私に斬りかかる。

10回、いやそれ以上だろう。こうやって斬り合ったのは。

私はインナーがボロボロだが、奴の装甲も私の攻撃でボロボロになっている。

「はあ、はあ…。」

「ふう…。」

私達は互いに距離を取っている。

「…どうした？何を笑っている？」

「いや…。私の早とちりを少し笑っていたのだ。」

剣を斬り合つて解つた…。

奴の言っていた事は本当だった。

今、思えばその場で戦闘をしても良かったのだ。

だが、それをこのフィールドで主に危害を加えないようにしていた。

「確かにあなたは主の家族なのかも知れませんが、私は騎士です。」

戦いを挑まれた以上、私に敗北は許されないので。」

「それはこちらと同じだ。例えばやてから拒絶されようと俺は彼女を守る。」

私はカートリッジを残り全てを使う。これが私の全力。奴も手にした剣がさらに長く大きくなる。

…これが最後の一撃になるだろう。

「紫電…。」

「…!!」

私は剣を振りかぶり、奴に斬り掛る。

それと同時に奴も剣を大きく薙ぎ払う動作をする！

「一閃!!」

「はあ！！」

ぶつかった瞬間爆発が起きる。

私は奴の後ろに立ち、奴は一步も動かない。

「く…。」

奴はうめき声をあげた。

だが…。

「あなたの…勝ち…です。」

私はそう言っで意識を失った。

ex^{イクス} | side

まさかここまでやられるとは…。

今俺はショートしているタキオンの右腕を見ている。

あと一步間違っていたら倒れていたのは俺かも知れない…。

「…さて、戻るとするか。」

俺は気絶している二人を見て、今後どうしようか考えた。

…やべ、もう夜中の2時半まわってるじゃん。

極限の絶望？！剣舞のタキオン！（後書き）

… ヴィータ不遇（汗）

ヴィータファンの皆様すいませんでした。

誕生日〜家族といっしょプレゼント〜(前書き)

深夜に投稿です。あと二つ投降します。

誕生日〜家族というプレゼント〜

シヤマル side

私とザフィーらは消えた二人とロボットとなった男と共にどこかに消えた…。

魔力が感じられなかったから転移魔法じゃない？

「!？」

そう考えていると空間が歪み、現れたのは先ほどの男性。その隣にはシグナムとヴィータちゃんが気絶してしる。

「シグナム！ヴィータちゃん!!」

「動くな、シヤマル。」

私が二人の元へ行こうとするとザフィーラに止められた。

「…。」

男性はヴィータちゃんを抱きかかえて、私達の方へ差し出した。

「気絶はしているが、傷はそれほど深くない。だが、念のため君が治療をしる。」

彼はそういつとヴィータちゃんを降ろし、次にシグナムを運んできた。

私はその様子に戸惑いつつも二人に治癒魔法をかける。

「…その様子では二人は負けたようだな。」

「ああ。だがそのこのピンクの子に一撃入れられたけどな。」

たった一撃…。私達の将が彼に一撃しか与えられなかったのに驚きを隠せない。

「俺が勝ったから俺の話聞く。いいな？」

「…わかった。」

ザフィーラは少し考えた後、頷いた。

「…お前らの部屋準備するからとっと寝ろ。」

「…は？」

はやて side

「うーん…。」

あれ？うち、いつの間に寝てたん…？って！？なんでイクにいが同じベットで寝てんの！？

あかん！あかんて！！まだうちら結婚しとらんねんでノノノ！

「ん…？起きたか、はやて。」

イクには目を覚ました。

うちは顔を赤くするのをなんとか我慢する。

「お、おはよう。イクにい。」

「ああ。おはよう。はやて、服を着替えたら少し話したいことがあるんだ。良いか？」

話したいこと？それって…まさかプロポーズ！？

あかんで／／／！うちはまだ8歳や！そ、それにまだ心の準備が…／／／！！

「…？どうした？」

「な、なんでもあらへんよ／／／！！あ！ほらイクにい、朝ごはん作らなあかんで！！！」

「…そうだな。あいつらの分も作らなきゃな。」

うちはなんとか誤魔化したけど、イクには最後小声でなんか言っていた。聞こえんかったけど…。

とりあえず服を着て、リビングに向かったけどいつもの風景やなかった。

「おはようございます。主。」

「「「…。」」」

うちの前には見知らぬ4人がおった。

「…お前たち、はやてが困惑しているぞ。」

うん。めっちゃくちゃ困惑してる。

…どっぴいっぴいっ。

ヴィータ side

あたしの名はヴィータ。

…今、あたし達は昨日あたしとシグナムをボコボコにした奴のご飯を食べてる。

それは数分前の事だった。

―数分前。

「今日はフレンチトーストだ。すまないな。」

「ううん…かまへんよ…。」

あたしらの新しい主は困惑しながらあたしらを見てる。

…こいつも今までの奴らと同じなんだろうな。

するとテーブルにさらに4つ皿が置かれた。その皿の上に乗っているのはあいつと同じ料理だった。

「あの、これは…。」

「…冷めるぞ。」

あいつはそう言って居間から出て行った。
その時、新しい主が少し笑ってた。

「イクにはある意味不器用やからな。うちらと一緒に食べよって
言ってるよ。」

あたしたちのために…？

あたしだけじゃなく、シグナムたちも茫然としている。
そうしていたらあいつが戻って来た。

「ん？まだ食べていないのか？」

「あはは…。何や変な人やらなあ。イクにいの料理はとてもおいしいのに。」

…確かに良い臭いだけ。

ぐううううう…。

！？し、しまった！！

「ヴィータちゃん。もしかして…。」

「ち、違う！！そんなんじゃねえ！！！」

「…手遅れだ。諦める。」

くくく／＼／＼！！もう我慢できねえ！

あたしは料理はあるテーブルへと行き、椅子を座ってフォークとナ

イフを使って料理を食べる。

!!! やばい、テラつめえ。あたしは料理を食べて思った。

イクス
e x | s i d e

俺たちは朝食を食べ終えてはやての部屋にいる。

…しかし、朝食でまさかヴィータだけじゃなくシグナムまでおかわりを要求するとは。

それほど腹が減っていたのか？（単純においしかっただけ。）

「そうなんや…。この子は闇の書って言うんやね。」

「御意。」

今、はやてはシグナム達から闇の書に関する事を聞いている。聞いていたがやはりアニメの設定どおりだ。

「夢の中で何か言っていますでしたか？」

「うーん。曖昧やけど…なんか言ってたような…、あった。」

はやては小棚からメジャーを取りだす。

「でも、ひとつ分かったことがある。闇の書の主として守護騎士皆の衣食住きっちり見なあかんと言う事や。幸い部屋は余ってるし料理はうちとイクにいが出来る。皆のお洋服を買ってくるからサイズ

測らせてや。あ、イクには出てっとな。」

ま、こっつなるだろうと思っただけだ。

ザフィーラ side

我はヴォルケインリッター盾の守護獣、ザフィーラ。
今、我は変身し、狼の姿になっている。…決して犬なのではない。
そして廊下にいる。

「あ！これかわいい！ヴィータ！これ着てみて！」

「え！？お、おう…。」

「ふむ…。下着にもこんなに種類があるとはな。」

「これにしようかしら？」

居間では女性陣が洋服を物色している。

…今までの主はこのような事をしてくれなかった。

「…どうしてって顔しているな。」

「お前は…。」

家に入って来たのは主の家族…
イクス。

両手には大きくなった袋が入っている。

「簡単さ。彼女は優しいのさ。」

「…まるで経験しているような言い方だな。」

「俺もお前たちとは違うがこの家に倒れていた。そこで彼女は何をしていたと思う?」

…?

「はやては俺の分の飯を用意してたのさ。」

…それは今朝 イクス e x | がしたことと同じ。

「それにこれは彼女にとってとんだサプライズにもなったしな。」

イクス e x | はそう言って居間に入って行った。

我も後に続いたが、…サプライズとは?

はやて side

夜になってウィータと一緒に風呂に入った。いや、お風呂は良いわ。

今日の晩御飯の担当はうちやってんけどイクにいが「今日は俺がやる。」と言った。

何するんやろ？

リビングに入るとテーブルのは豪華な料理が並んでる。
その中でも目を引いたのは真ん中にある苺のホールケーキ…。

「はやて、上がったか。」

「う、うん。イクにいこれは？」

「お前の誕生日パーティに決まってるだろ？」

うちの…誕生日パーティー？

「石田先生から教えて貰ったんだ。慌てたぞ？」

あのケーキ…。もしかして夜のうちに作って…？

うちはイクにいに連れられ椅子に座る。

そしてそのケーキのチョコプレートの板にはこう書かれた。

<ハッピー・バースデー！はやて！>

…ずるい。ずるいわあ。

うちの方が驚いてもうたやん。

「はやて。誕生日、おめでとう。」

「おめでとういじやいます。主はやて。」

「…おめでとう。」

「おめでとう。おめでとう。」

「...おめでとう。」

皆..。

今日は、今日は最高の誕生日だ...！
ありがとう...、イクに...。皆..。

事情説明 | ex | (イクス) | (前書き)

連続投稿その1です。

ここではかなりご都合主義・オリ設定があります。
注意してみてください。

事情説明「ex」(イクス)

誕生日パーティーが終わった後、はやての部屋にはやてとヴィータを寝かせた。

…やはりまだ子供だな。

(そうだ…子供は宝なんだ…)

俺は二人に布団を被せ部屋を出る。

そしてリビングにはシグナム、シャマル、ザフィーラが待っていた。

「…聞かせて貰おうか？お前の正体について。」

「ああ…。」

俺は…この家族を守ってみせる。

例え世界から疎まれたとしても…。

シグナム side

私達は今、私とヴィータを倒した男、^{イクス}ex」と話している。

その中心にあるのは奴の正体だ。

奴は人間の身体からいきなりロボットへと変身した。そして魔法ではない何かで別の場所に転移された…。

今俺が話しているのは真つ赤な嘘だ。しかし、俺が話している事はあながち間違いではない。

夢の中で何度も残酷な風景を見せられる…。たまったものではない。

「時空管理局は人材の人手不足を解消しようと裏では様々な非道な人体実験を行っていた。

そこで出されたプランの一つ…。それは人間の人格を完全にデリートすることだった。」

「デリート？」

「管理局は自らの正義が正しいと思わせるよう人格を完全に破壊し、忠実な人形にしようとした。」

「なんという…！」

「俺はその実験の最中、肉体が実験に耐えられず死んだが、意識は思念体となって世界を彷徨った。

そして俺は力を手に入れた。」

「それが…エクストリームガンダムと言うわけか。」

…正直、嘘を言うのはつらい。だが、ここで管理局が間違ったことをしていると教えなければ彼女たちも…。

「俺はエクストリームガンダムの変身能力を得ると、それを応用し、今の身体を作りだした。」

「でも、あなたには魔力は感じられないわ。」

「元々エクストリームガンダム自体が別世界の産物だったのさ。」

「別世界の産物だと。」

「ああ、エクストリームガンダムを調べてたら、こいつに共通する言葉があったのさ。」

それは…ガンダム。」

「ガンダム？」

「元々こいつの世界では全長18mもの巨大なロボットを人が動かし、戦争をしていた。」

だが、こいつが生まれた時点で地球圏には人がいなかったそうだ。

…恐らく戦争で全滅したんだろうな。」

嘘は言っていない…はず。

「では、あの巨大なパーツはなんだ？」

「あれは近接戦闘特化型パーツ「タキオン」だ。そして砲撃戦闘特化型の「カルネージ」、
広範囲戦闘特化型の「イグニス」がある。」

「あんなのがあと2つもあるのか…。」

確かにな。初見でどうやって倒したら良いのかわかんねえわな。

「そしてあのフィールド…」「エクストリーム・ユニバース」はエクストリームガンダム専用の戦闘フィールドだ。俺の意思で展開でき、周辺の環境にはなんの影響もない。」

俺はそう言っただけで立ち上がり柵からコップを4つ取り出す。そして冷蔵庫からジュースを取り出し、注いでいく。

「話を戻そう…。俺が能力を手に入れたことで管理局は動き出した。」

目的は言われなくてもわかるだろう。」

「捕獲して自分たちの物にするため…。」

シヤマルがつらそうに喋る。

「幸い、非殺傷能力が効くことが解ったから俺は追っただけで連中を全倒した。」

そして俺ははやてに助けられたのさ…。」

話を終えた俺はそう言っただけでジュースを飲む。

…やはり嘘は言いたくないな。

シヤマル side

ex^{イクス} | さんは私たちが想像を絶するほどのことを体験したのね…。

「俺はもう戦いたくない。だが、はやてを傷つけるといつのやら俺は戦かう。」

それはお前たちも一緒だ。俺たちは家族だからな。」

ex^{イクス}「さんがそう言うとき少し笑った。
なんて優しい笑み…。」

「すまないな…。暗い話をして。もう寝よう。」

ex^{イクス}「さんが立ち上がり出て行くとする。
私は思わず立ち上がった。」

「大丈夫ですよ。ex^{イクス}さん。」

「え？」

「それは私達も同じ気持ちですから。」

「そうだ。我らは家族だ。お前一人に戦わせるわけにはいかん。」

私とシグナムの言葉にザフィーラも頷く。

「そうだな…。俺は一人じゃないんだよな…。」

ex^{イクス}「さんが小さく呟く。

「ありがとう…。」

そう言って部屋を出た。

「二人とも。この話は主には話さないでおく…。」

「ええ…。」

「いつか…自分で話すときまで我らは待とう…。」

私達はそう誓った。

日常〜平穩が一番〜(前書き)

日常パートその2です。

日常？平穩が一番

「e^{イクス}x | ~、まだか？」

「はしたないぞ、ヴィータ！」

「良いじゃない。それにシグナムだってe^{イクス}x | さんのデザート楽しみにしてたくせに。」

「なっ / / ! ? べ、別に私は : / / ! ! !」

「あはは。シグナム顔真つ赤やで。」

「主！」

∴ 現在俺は大忙しである。

なぜなら今俺は必死にデザートを作ってるからである。

ヴォルケインリッターが家族になって早1週間。

シグナムは剣の稽古で、ヴィータはデザートで、シャマルは料理で、ザフィーラは筋トレで仲良くなった。

しかしヴォルケインリッター女性陣がもっとも楽しみにしているのは俺の作るデザートだ。

はやての誕生日の日は俺の事を警戒していたのだが、その翌日ヴィータにもう一度食べたいと言い出したのだ。

だが昨日のケーキはすでに完食済みのため、代わりにとしてのプリンを作ってあげたのだ。

ちなみにその時のヴィータの感想は

「人生でこんなテラうめえプリン食った事ねえ…。」

と涙を流しながら食べていた。

それを聞いたシグナムとシャルルも食べたいと言い出し、食べさせたのだ。

ちなみにザフィーラは甘いものは苦手なのでザフィーラの分は作っていない。

「ほい。できたぞ。今日はゴマ団子だ。」

「へ。珍しいな。イクにいがゴマ団子なんて。」

「ゴマが安かってな。」

「へっへ。もっらい！」

「あ！ヴィータちゃん！それは私の！」

「うむ…。また腕を上げたな。」

八神家の女性陣はゴマ団子をおいしそうに食べる。

管理局に入らなかつたら『八神食堂』を開くのも手なのかも知れないな。

そう考えていくと一人落ち込んでいる奴がいた。シャルルだ。

「どうした？」

「うっ……。どうして私の料理は上手くならないのかしら……。」

「仕方ねーだろ。シヤマルだし。」

「そんなことないもん!!」

そう。俺も元の世界では「シヤマルの料理は壊滅的」と言う情報を聞いていた。

二次小説では拳句の果てに毒物を作りだすまでだった。

俺も一応シヤマルの料理を見てみたが、それはもはやテレビどころか漫画ではお見せできない物だった。

軽くホラーだった。

ちなみに我が八神家では食事担当は俺・はやてとなっており、月・水・金がはやて、火・木・土が俺で日曜日交代でやっている。シヤマルは主にサポートに回ってくれるが、俺とはやてがサポートして一品作るまでは許可している。

ちなみに前の日曜日はエビチリだったが……、どうしてソースが紫色になった？そしてなぜエビがモザイクを掛けなければならないほど気持ち悪いものになった？

「もー!!絶対に皆にぎゃふんと言わせるんだから!!」

意気込むのは良いが、もう少し腕をあげてくれ。

味見をするザフィーラがかわいそうだ。

そして現在八神家の料理の腕は

俺〃はやて>>>>>ザフィーラ>>>シグナム〃ヴィータ>>>
>越えられない壁>>>>>>>>>>シヤマル

となっている。

精進したまえ。シャマル、応援はしておく、雀の涙程度で。

そして午後、本日は仕事は休みのため今日は庭で鍛練をしている。

実はこの世界に来てから考えていたことだが、シグナム達見たいな騎士甲冑、簡単に言えば

バリアジャケットのようなものを作れば良いのか考えていた。

しかし、後々考えてみたら俺の能力は下手したらロストログリア指定されかねない。

というかなっているかもな、猫姉妹の戦闘で。

（変身能力の応用で作るか。）

俺は『エクストリーム・ユニバース』を展開し、どのようなフォルムにするか考える。

（やはり基本はエクストリームを元にするか。武装はガンプラであったギター型のビームライフルと
シールドとビームサーベルだな。特にビームサーベルはフリーダムみたいに腰に付けるとするか。）

俺はイメージを固め、変身を行う。

上半身は白を基調に黒のラインが入ったジャケット、下は黒のジーンズ、そして靴は紅色のスニーカーにした。右手にはイメージ通りギター型のビームライフル、左腕にはシールドを装備している、勿論ビームライフルの収容も可能にしている。

「よし。こんな感じか…。後は実践なんだが…、そうだ。」

俺はシグナムに念話をしてみる。
ちなみに俺はシグナム達に教えて貰ってリンカーコアを習得しているが念話がやっとできる程度だ。

(シグナム。少しいいか?)

(^{イクス}ex「か、どうした。)

(少し模擬戦をしてほしい。もし(いや!直ぐに行こう!!)…おい、聞けよ。)

フィールドの展開を止めると目の前にはシグナムがいた。
しかも騎士甲冑を着て。

「ふふふ…。今日こそお前を倒させてもらうぞ!」

ちなみにシグナムと鍛練するときはいつもタキオンでやっている。
成績は30戦13勝12敗5分である。

これは単純にスピードの違いだ。

タキオンは他の2つと比べると地形対応が低いため、例え『イクス
トリーム・ユニバース』を展開しても

シグナムの方が勝る。しかし、攻めに関して言えば圧倒的にこちら
の方が勝る。

あの時も、若干俺の方がスピードが遅かったため右腕が斬り落とされたのだ。

「いや、今日は少し試してみたいことがあるんでな。すまないが今日は無しだ。」

「む…。そうか。しかし、試してみたいこととは？」

「これぞ。」

俺は先ほど作ったバリアジャケットもどきに变身する。それを見たシグナムは驚いているがすぐに冷静になる。

「なるほど。变身能力の応用で作ったのか。」

「ああ。」

「となればそのテストか？」

「そんな所さ。」

俺は再びフィールドを展開し、ビームライフルを構える。

シグナムはレヴァンティンを構えこちらを見据える。

「行くぞー!!」

シグナムの言葉で俺たちは模擬戦を開始した。

結果はシグナムの勝利だった。

模擬戦してわかったがやはり全体的に火力不足が原因だった。

そして俺はエクストリームVSで使えたブーストキャンセル・ステツプキャンセルが行えるが、

逆にこの世界の魔法は使えない。

例えばシールドは盾を構えた方向で防げばスターライト・ブレイカーでも防げるが、

アクセル・シューターのような全方向型は防ぐことができない。

そして武装自体がなあ…。
まだ少しだけ時間はある。ゆっくり考えて対策を考えるとしよう…。

今日の食事当番ははやてだ。

はやての料理は基本的に和食が多い。俺はどちらかと言えば洋食・中華だ。

「やっぱりはやての料理はギガうまだぜ！」

「でも…、イクにいのデザートと比べると負けるんよなあ…。」

「大丈夫だ。はやてのデザートも上手くなってきている。いつか俺を超えるさ。」

…やっぱり『八神食堂』を人生設計のプランに入れておこう。

シエフは俺とはやて、接待がシグナム・ヴィータ・シャマル、そして番犬でザフィーラが妥当か？

え？なんでシャマルを接待に？…客に毒物を提供する店なんてあるか？

こうして日常は過ぎていく。

だが、確実に時間は迫っているのもまた事実だった…。

日常？～平穩が一番～（後書き）

今回新しく出たバリアジャケットもどきは次に出す能力設定で詳しく載せます。

…あまりチート無双はしたくないので。

蒐集開始〜責任は皆でとるモノ〜（前書き）

かなり原作をブレイクしてます。

原作ブレイクが嫌いな方は見ないほうが良いです。

蒐集開始〜責任は皆でとるモノ〜

「ふおおお、久しぶりじゃの。」

気がついたとき俺の目の前にはあの神がいた。

「なんのようだ？」

「お前さんに新しい力を渡そうと思つての。」

そう言つと俺の身体が赤く光る。

「お前さんが作ったバリアジャケットもどきの最大の弱点は火力じやろ？」

そこでお前さんにはMSの武装を使えるようにした。」

なんだよそのチート。

「だが、強すぎる兵器に関してはリミッターをかける。だいたいオリジナルの6〜7割ぐらい抑えるぞ。

まあ、それでも強すぎるが…。」

…呆れて何も言えない。

まあ、使用しなければ良いだけだしな。

「防御に関してはどうやらお主はもう解決策を見つけてるようじやからこれくらいにしておこう。」

あたりまえだ…。これ以上チートになつてたまるか。

「時は迫ってきている…。悲劇を起こさぬようにな。」
神がそう言つと俺の意識は薄れていった。

シグナム side

私達とはある屋上のビルにいる。
石田先生から聞かされた事実。
それは主はやての足の麻痺は進行していることだった。
そしてそれは病気ではなく闇の書の呪いだった。
主の未熟なリンカーコアを蝕み健全な身体どころか生命活動さえも蝕んでいた。
そしてそれは主が第一の覚醒をしたことさらに加速され、私達の活動を維持するためにも無関係とは言えなかった。

「我らの不義理をお許してください!!!」

「ふう…、それは俺にも…だろ？」

「……!?!?」「」

私達は声のする方向…。上空を見た。

そこに居るのはバリアジャケットを着た私達の家族：ex^{イクス}|^{イクス}だった。

ex^{イクス}| side

やはりな…。今日病院から帰って来たシグナムとシャルルの様子がおかしいと思つて密かに追つてきて良かったよ。

「どうしてお前がここにいるんだよ!？」

「うるさい、家族である俺とはやてに内緒で約束を破る奴が言う事か？」

俺はそう言つとシグナム達の中心に降りる。

「お前ら一体なにがあつた？」

「それは…あなたに教えることはできません。」

シグナムが少しつらそうな顔をして言う。

…つらそうにするなら言つちまえば良いものを。

「そうか…。つてことは俺たちはまだ家族として認識されてなかつたつてことか？」

「ち、ちが「違わない!」…!？」

「お前たちはそれほどの重要な事をどうしてお前たちだけで解決しようとする!!」

俺達は家族だろうが!!家族つてのは喜びも苦しみも一緒に感じるんだ!!お前らだけが苦しんでんじゃねぞ!!」

俺が怒つてるのは蒐集することではない…。

それほどの重要なことを何故俺とはやてに伝えなかつたということ

だ。

俺の思いが伝わったのか、シグナム達は顔を俯いている。

「ふう…、とりあえず帰るぞ。それからこの事はきちんとはやてに伝えることだ。良いな。」

「…ああ。」

ザフィーラは返事をしたが、他の3人に返事がなかった。
…しょうがない。

「それから3人は一ヶ月デザート無しだ。コンビニのデザートでなんとかしろ。」

「…「ちょ、ちょっと待ったー！ー！！！」」

デザート禁止令を伝えるとシグナム達が反応する。

「ど、どうしてだ！？なぜ私達だけ！？」

「そ、そうだよ！確かにあたしたちは約束破ったけど！」

「そ、そこまでする必要はないと思います…！」

3人は必死に弁明しているが、残念ながら決定事項だ。

「言い訳は無しだ。お前らは約束を破った。…罰にはふさわしい罰を与える。」

これ社会の基本だよ？」

俺はそう言いながらも屋上を後にする。シグナム達は必死に説得を続けるために俺を追う。

その後をザフィーラが追う形で家に帰った。

ちなみにこの禁止令はきちんと施行され、一ヶ月間シグナム・ヴィータ・シャマルは泣く泣くコンビニのデザートを食べることになった。

はやて side

病院へ言った翌日。

うちは今シグナム達の説明を聞いている。

そしてイクにいが持っている不思議な力についても。

「すみません……。私達のせいです。」

「ううん。ええよ……。それにこれはどうしようもない。」

そつ……。どうしようもないんや……。

「……はやてはそれでいいのか？」

「え？」

「……俺だったら最後まで足掻くな。」

イクにいが？

「俺はそこまで無抵抗のまま死めのは嫌だ。だったら少しぐらい足掻いてから死ぬ。」

「それで助かったら良いんじゃないか？」

最後まで…足掻く…。

「はやて、本当にこのまま生きること諦めるのか？」

「うちは…、うちは…！！」

「生きたい…！うちも…皆と一緒に生きたい…！！」

「それで良いんだ。」

イクにいがうちの頭を撫でてくれる。

「うちは思わずイクにいに抱きついて泣いてもうた。」

「うわああああん！！！！」

「良いんだ。今は泣けば良いんだ。」

「うちが泣いている間、イクにいは撫で続けてくれた…。」

「うちが泣きやむと病気を治せるかも知れない方法をシグナム達が教えてくれた。」

「それは魔力の蒐集を行い、うちを完全な主にするこことやった。」

「でもそのためには他の人のリンカーコアを蒐集せなあかん。でも、」

うちは人を傷つけとうない。

「…うん。うちもこのまま何もせずに死ぬわけにはいかん。でも、絶対に人を傷つけたり、その人からリンカーコアを蒐集したらあかん。」

「あとは管理局だな。」

そう、シグナム達から聞かされたのは時空管理局と言う組織のことや。

何でも次空世界の守護者とか言つとるけど、闇の書自体が危険やら例え助けを求めたとしても犯罪者扱いになるってイクにいが言う。それにシグナム達も賛成や。でも、管理局知らんはずのイクにはそんなに管理局の事嫌いなんかな？

「はやて。全ての人のはやてみたいに優しいとは限らない。

中には人を駒のように扱い奴もいれば、俺たちを利用する輩もいるかも知れない。

だから協力はできないのさ。」

とうちに説明した。

…でもイクにいのその時の顔は凄く怖かった。一体、イクにいとその管理局で何があつたん？

その時、うちは早く知っておくべきやつた…。

イクにいがどうして管理局をそれほど信用していなかったか…。

どうしてそんなに管理局を嫌っていたのかを…。もっと早く知っとくべきやつた…。

蒐集開始〜責任は皆でとるモノ〜（後書き）

と言う事ではやてにも知ってもらったことにしました。

ここで原作と離れることになりましたが、ご了承ください。

必然の遭遇と覚悟（前書き）

本当にサブタイの才能がない自分…。
だれか…だれかアドバイスを…（泣）

必然の遭遇と覚悟

俺たちが蒐集を始めてもう200頁ぐらいたまりだした。

管理外世界でリンカーコアを持つ生物でなお且つ質の良いのを狙ったからだ。

主に龍とか竜とか時々ミニミズもどき。

「あれ？ヴィータは？」

俺はヴィータの帰りがやけに遅いなと思った。

それを聞いたシャマルはヴィータを探し出すといきなり慌てだした。

「た、大変！ヴィータちゃん、魔導師と戦ってるわ！！」

「なんやて！？」

「あいつ…。焦りやがったな…。シャマル一緒に行くぞ！！」

「はい！」

俺は家を出てヴィータの元に行った。

ヴィータ side

今あたしはこの街で時たま反応する魔力を持つてる奴を探してた。封時結界を張って探ってみれば大物だった。これぐらいの魔力なら50頁ぐらいは埋めれる！

そしてその魔導師は白いバリアジャケットを着て、戦闘を開始した。

もちろん相手はボコボコだけど傷は軽傷だ。

そんな時、管理局の魔導師がやってきやがった。金髪の黒のバリアジヤケットを着てやがる。

使い魔もいるようだけど、あたしが優勢だ！

「うおりやああああ！！って!?!」

バインド!?!両手足にバインドが張られた!?!下を見るとあの使い魔の仕業だ!クソ!!

「終わりだね。名前と出身世界、目的を聞かせて貰うよ。」

くそ!打つ手ねえのかよて…。そう思った時だった。

(ヴィータ、動くなよ!)

(え?)

< Protection. >

「え!?!キヤア!?!」

金髪の魔導師の前にデバイスが防御魔法を張ったり、ピンク色の光線を弾いたが、威力がありすぎて吹き飛ばされた。

…てかこの声、まさか!?!?

あたしは光線が放たれた方向を見る。

そこにはあいつがいた。

「^{イクス}ex」、狙い撃つ!?!」

イクス
ex | side

俺は今、バリアジャケットモード（命名俺）でガンダムデユナメスのGNスナイパーライフルを構えている。

バインドで捕まったヴィータを助けるために魔導師ーフェイトを狙撃した。

一応確認したが、どうやらデバイスが防御魔法を張ったので怪我はないようだ。

「シャマル、俺達は怪我した子に行くぞ。」

「えええ！」

俺たちはヴィータが攻撃した子ー高町なのはの元に行く。

ちなみに今の俺はフル・フロンタルの仮面を被っている。正体がばれないようにだ。ちなみ声も替えている。もちろんボイスは池田ボイスだ。

「「!?!?」」

「そう身構えなくても良い。シャマル、彼女に回復魔法を。」

「はい。癒しの風よ...。」

シャマルの回復魔法は（恐らく）ユーノよりも上だから回復も早い。それに彼もなのはに回復魔法を

かけているからさらに回復するだろう。

「き、傷が…。」

「でも、あまり無茶はしないでくださいね？」

「行くぞ。シャマル、撤退だ。」

俺はシャマルに声をかけ、ヴィータと途中で合流したシグナム・ザフィーラに念話を送る。

（3人とも撤退だ。）

（ちょっと待てよ！こいつらの魔力を蒐集すれば…！）

（ヴィータ、約束を忘れたわけじゃないだろう。彼女は人を傷つけるなど言った。

この事はきちんと報告するぞ。あとお前はしばらくデザート禁止だ。）

（う…。はい…。）

俺は念話を送り終わると、シャマルと一緒に撤退しようとするが、頭の中に電気のようなものが走る。

シャマルを抱き、そのまま一気に空へと上がると俺達のいた場所には鎖状のバインドがあった。

「何の真似かね？」

「…なのはの怪我を治してくれたことには感謝している。でも、おとなしく投降してください。」

この後すぐ管理局が駆けつけます。」

魔法を使用したのはユーノだった。

しかし意外だな…。彼がこのような行動をするのは…。やはり平行世界だけあって何が起こるか分からないな。

「残念だが、こちらにも予定があるのでね。」

俺とシャマルは転移魔法で撤退した。それと同時に結界が解除される。

「!?!?しまった!?!」

ユーノが気付いた時にはもう俺たちはいない。

俺は全員に聞こえるように念話を使った。

(お前たちでは俺の…。いや、俺達では役不足さ…。本当の意味での戦かう覚悟のない者にはな…。)

俺はそう言って念話を切った。

…さて、ヴィータに O S H I O K I だな…。

フエイト side

(お前たちでは俺の…。いや、俺達では役不足さ…。本当の意味での戦う覚悟のない者にはな…。)

突然だった。

いきなり念話を使って話しかけてきたから。アルフも驚いているから聞こえているんだろう…。

…それよりもなのは様子を見に行かなきゃ！

けど、私はこの言葉は頭から離れなかった…。

そう…。私達が相手にするには力だけじゃない心も強い人たちと戦わねばならないことを…。

私達はまだ知らなかった…。

能力説明（前書き）

能力説明です。

能力説明

・変身能力

神によって与えられた能力。人間形態からエクストリームガンダムへと変身できる。

この能力を応用することでバリアジャケットモードや、声を変えることもできる。

人間の姿は変えられない。

・バリアジャケットモード

主人公が新しく生み出した能力。一応主人公は念話ができるレベルまでは習得できたが、バリアジャケットまでは構成できない。そこで変身能力の応用で作りだした。そのため魔力を感知できない。

ベースはエクストリームガンダムを元に行っているが、所々オリジナルの部分を入れている。

後に神からMSの武装を使えるが、あまりにも強すぎる兵器などは出力・威力を抑えられている。

力自体はガンダムが10とするとこのモードは5〜6となっている。

・エクストリームガンダム

主人公が変身能力によって出来る形態。変身能力は元々エクストリームガンダムになるための物である。

主人公がその応用で前項のような能力が出来たいわば副産物であり、これが本来の姿である。

全身がロボットの状態になり、エクストリームVSで対決するカルネージ、タキオン、イグニス3つの支援パーツを用いて戦闘を行う。この状態で戦闘するときは必ず【エクストリーム・ユニバース】を展開する。管理局に絶望を与えるための力であり、大切なモノを守るための力でもある。

・カルネージ・フェイズ

【殺戮】の名を持つエクストリーム専用の支援パーツ。背部にあるコンテナが特徴。

はやてを監視するアリア、ロツテとの戦闘で初登場。

砲撃戦を得意としており、ある程度の格闘戦も行える。

武装は大型ビームライフル、火球弾、重力砲、コンテナミサイル、衝撃波、照射ビームである。

なお、照射ビームに関してはなのはのスターライトブレイカー以上の威力を誇り、溜め動作なしで発射可能である。

・タキオン・フェイズ

【高速】の名を持つエクストリーム専用の支援パーツ。巨大なビームソードが特徴。

はやての前に現れたシグナム、ヴィータとの戦闘で初登場。

近接戦を得意としており、一度接近されたら怒涛の如く攻撃をする。

武装は大型ビームソードだけだが、重力ボム、ダメージ付き衝撃波、また巨大剣を作り出す能力もある。

ちなみにシグナムとの模擬戦時はいつもこのフェイズでやっている。

・イグニス・フェイズ

【篝火】の意味を持つエクストリーム専用の支援パーツ。

現在まだ未登場。

広域戦闘を得意としており、さらに高い機動力も備えている。

武装はファンネルを中心にしており、小型16基、大型8基、補助に2連ビーム砲を装備している。

ファンネルの攻撃には氷結系もあるため、攻撃に当たると動かなくなる。

他にも球体弾、ファンネルスケボー、ファンネルスパアースターライトブレイカーも防げるファンネルバリアーもある。ただしバリ

アーを張ると使えるファンネルに制約が掛かる。

・ ????

現在封印中。

能力説明（後書き）

随時更新していきます。

特訓？（前書き）

遅いですけど、おめでとございます。

新年になって身が引き締まる毎日を送っています。小説でも、仕事でも。

では、とござ。

特訓？

ヴィータがなのはを襲撃してから早1週間。今回蒐集は中止している。

これは管理局の動きが本格的になるためおいそれと行動できないのもあるが管理局の動きも気になるからである。

そして今、俺達は【エクストリーム・ユニバース】でとある模擬戦を行っている。

それは2on1での模擬戦だ。

「縛れ！鋼の軛！！」

「紫電…一閃！！」

「てりゃあああ！！こんのー！！」

今、戦っているのはシグナム・ザフィーラ対ヴィータで戦っている。なぜ俺がこれを提案したのかと言うと戦闘対策の一つだった。

まずこちらの状況だが、現在闇の書の頁はようやく300頁。

これは原作よりも少しペースが遅い。なのはの魔力を蒐集しなかったことで、ペースを上げなければならなくなった。そしてこの活動で最大の問題点は管理局だ。

管理局の戦力はなのは、フェイト、アルフ、ユーノ、そしてKYとクロノの5人。

そしてこちらは俺、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラと数は同じだ。

しかし、こちらは蒐集を行うため、纏まって行動することができない。

そこで2on1でも模擬戦をしている。VSシリーズでは2on1どころか3on1、4on1はトリアルミッションでやっていたので活用できないかと思い、皆に相談したところ以外にも全員から承諾を得た。

「ザフィーラは少し守りに入るな。もう少し攻撃しても良いんじゃないか？」

「なるほどな…。」

「シグナムは少し攻めすぎだ。近接戦闘特化もあるが、もう少し立ち回りを考えて戦ってくれ。」

「ふむ…。改善しよう。」

「ヴィータは相手の状態を良く見て攻撃だな。ヴィータはヴォルケインリッターの中でもバランスが良いから、相手の立ち回りや状態を見て攻撃手段を考えてくれ。」

「おう！」

俺とシャマルが模擬戦を見て、それぞれの改善点を見つける。

これは他のメンバーも同じだ。

ちなみに戦闘スタイルは

・俺（バリアジャケットモード）、ヴィータ…バランス型。

・シグナム…近接型。

・シャマル…補助・防御型

・ザフィーラ…防御・近接型

となっている。

俺の場合はさらに支援パーツがあるためさらに3つになるのだが、これはあくまでも最終手段だ。
おいそれと見せていいものじゃないからな。

「じゃあ、次は私とe^{イクス}x|さん、そしてシグナムね。」

「ふ…。腕がなるな。」

「んじゃ、やりますか!」

こうして俺達は特訓を開始した。
え?どうなったって?…想像にお任せします。

はやて side

今、うちは図書館で最近知り合った月村すずかちゃんと話してる。
すずかちゃんとはうちが図書館の本が取れなかった時に本を代わりに取ってくれた。

その時に、うちとすずかちゃんは仲良くなったんよ。
もちろんイクにいやシグナム達にも紹介したんよ。

…でも、なんかすずかちゃんイクにいを見る目が少し熱っぽいよう
な…。

「へえ、そうなんだ。」

「そやで、前にイクにいがなシグナム達を銭湯に連れってな。一人だけ寂しかったって言うとったんよ。」

「うふふ。良いなあ、はやてちゃん。私お兄ちゃんなんていないから凄く羨ましいと思うの。」

「そんなことないよ。うちもお姉ちゃんなんかいないしな。」

シグナムやシャマルは家族として認識しとるけど、なんかお姉ちゃんって感じじゃないんやな。

「あ！でも、^{イクス}exさんがお姉さんだったら？」

「え？イクにいが？」

イクにいが女の人…？

…。

…。

…。

あかん。めつつつちや負けるわ。

うん。お姉ちゃんって言うよりも女として負けた感じで。

「うーん。ちょっと想像できへんな。」

「そつだよね。私も少し考えたけど今のex^{イクス}」さんが良いよね。」

この日はイクにいの話題で日が暮れるまでお話しをした。
でもイクにいが女の人になったら絶対負けるわ…。

ex^{イクス}
| side

「…!？」

「どうした？」

「なんか、寒気が…。」

「…疲れているのかもしれない。」

そつかも知れないな。フィールドの展開を止めると俺はソファアで横になって仮眠をすることにした。

…なぜかヴィータが俺の上に乗って。

「一つ言っておくが俺は口コンではない!!」(隠れていません。)

特訓？（後書き）

戦闘シーンは次から入ります。
おやすみなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323z/>

魔法少女リリカルなのは～極限の力～

2012年1月7日01時47分発行